

4000万人の頭痛

『小児の頭痛』第2回 ～小児の頭痛とアレルギー性疾患との関連性について～

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

小児の片頭痛とアレルギー性疾患の代表格ともいえる気管支喘息との関連に関しては、従来、その合併率の高さがよく論じられています。その理由の一つに、喘息に関連したロイコトリエンという炎症物質が血小板という血液中の血液を凝固させる成分にも作用し、この血小板からセロトニンという神経伝達物質を過剰に放出させ、これが脳血管に作用し異常な収縮と拡張をきたし片頭痛を引き起こすのではないかと推測されているからです。また喘息発作の際には動脈中の酸素の取り込みが少なからず悪化することも、脳血管の異常な拡張を助長させ、片頭痛発作を誘発したり、増悪させたりしているのではないかと考えられています。

過去には片頭痛の発生機序の一つとして血管のアレルギーによる異常な拡張がその原因と考えられ、抗アレルギー薬が片頭痛の予防薬として処方されたこともあり、現在でも小児の片頭痛の予防薬としてシプロヘプタジン塩酸塩（商品名 ペリアクチン）が処方されることが多いのです。

また季節性のアレルギー疾患である花粉症も片頭痛を悪化させることが知られています。これは鼻粘膜に炎症を起すことで、鼻粘膜に分布している知覚神経である三叉神経が刺激され、この刺激情報が複雑な三叉神経のネットワークを介して、脳血管周囲に分布する三叉神経に伝達され、結果、脳血管を拡張させて片頭痛を悪化させるものと推測されています。このような際には気管支喘息と花粉症の両疾患に予防効果を示すとされているロイコトリエン受容体拮抗薬（商品名 オノン、シングレア）が片頭痛にも予防効果を示すことが欧米や本邦でも報告されているのです。小児の片頭痛で、頭痛はそれほど酷くはないのですが腹痛や下痢を強く訴えることがあります。これも腹部の小腸のアレルギーもしくは小腸で合成されるセロトニンの不安定な状態を反映しているのではないかと考えられています。片頭痛に関連した腹痛や下痢は、セロトニン自体が不安定になりがちな春先や秋口の季節の変わり目に多くみられる症状であり、

このような際にも、抗アレルギー作用とセロトニンを安定化させる作用を併せ持つ、先に述べたシプロヘプタジン塩酸塩が効果を発揮することが多いのです。小児では種々の要素が頭痛を増悪させたり、消化器症状など、別の症状を来すことがあるため、注意深く治療してゆくことが肝要なのです。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーンケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、マミーズクリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。『頭痛女子のトリセツ』（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「マンガでわかる頭痛・めまい・耳鳴りの治し方」
監修／清水俊彦 推薦／佐渡島康平
新紀元社（1,080円（税込）販売中。